修道

No. 67

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園（中・高）同窓会
〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241－8291　FAX(082)249－0870
TEL(082)241－6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp

同窓大会の様子

目　次

同窓会ニュース

平成20年度修道学園(中・高)同窓大会報告…田村　勇太…1372

支部だより

「平成20年度修道学園同窓会近畿支部総会」についてのご報告
……斎本　隆司…1374

同期会報告

えー同窓生から大臣誕生……大西　龍夫……1377

特別寄稿

修寿会開催報告　……木村　正勝……1378
山田養吉先生の「丙寅日記」を読む(その二)…畠　眞實……1379
ねんりんピックに出場して（生涯サッカーの現役として）
……林　孝治…1391

学園だより

第61回修道高等学校卒業式……1393

人物往来

スリム化と事業選択……山下　泉…1395
医師不足を解決しよう……碓井　静照…1395
開高健「河は眠らない」発売…青柳　陽一…1396
広島経済同友会代表幹事に高木氏…高木　一之…1396
中小活性化と地域力強化…大田　哲哉…1397
供給安定へ露からもLNG調達…深山　英樹…1397
都市の香り……上田　宗冏…1397
広島には新しいものを生み出す力…大歳　卓麻…1398
授業に活用浄土教研究……渡辺　郁夫…1398
汗流し奉仕の原点学ぶ……蔵田　修…1399
宮島観光客数を将来350万人に
夜のにぎわいで長期滞在目指す…中村靖富満…1399
学び合い市政に貢献を……野々部尚昭…1400

訃　報　……1400

事務局だより　……1401

小説「昭和まで生きた最後の大名 浅野長勲」…田中　佳樹…1401
平成21年度同窓大会開催一覧……1402
全国制覇を成し遂げました……1402
中学サッカー班県総体で50年ぶりの優勝　……1402
「母校修道の優勝を祝い讃える集い」開催　……1402
(中・高)同窓会名簿発刊について……1402

同窓会ニュース

平成20年度修道学園(中・高)同窓大会報告

高校第52回世話人代表　田　村　勇　太

平成20年度修道学園（中・高）同窓大会は、私達高校第52回生が世話人となり担当させて頂きました。

私は高校を卒業して１年の浪人生活を経験した後、東京の大学に進みました。そのままずっと東京で就職して暮らしていくのだろうと思っていましたが、いつのまにか気持ちは広島に戻る方向に固まっており、無事広島の企業に就職させて頂き社会人として慌ただしい生活を送っていました。そんな2007年の夏、社会人３年目の私は、高校時代の同級生から電話をもらい、「９月の同窓大会にとりあえず行かなきゃいけないから予定空けといて。ちなみに来年は俺らの代が幹事らしいよ。」と言われ、高校を卒業する時、恩師の方々に「卒業して９年経ったらお前たちが代表で修道全体の同窓会をするんだぞ。」と言われたのを思い出しました。状況がまだよく分かっていない中、同級生との話の流れで、私が世話人代表を務めることが決まり、平成19年度の同窓大会で引き継ぎの挨拶をし、私達の代の１年はスタートしました。

引き受けた後で知ったのですが、近年広島での同窓大会は来場者が少なく、盛り上がりにかけているため、平成20年度の同窓大会からは是が非でも盛り上げていかなくてはいけないということだったらしく、相当責任を感じました。

同窓大会を運営していくにあたっての、主な仕事は大会誌への広告掲載の依頼、チケットの販売、同窓大会の進行等、どれも当たり前ですが初めてのことばかりで何から手をつけていいか分からないことばかりでした。同級生も、広島にいる人数自体が少なく、また広島にいても時間を自由に使える者が少なく、主力として動けたのは私を含めごく少数でした。このままでは平成20年度の同窓大会は大変なことになると思っていたところ、そのような状況を加味して頂き、私達の年から10回毎の先輩達が同窓大会にご協力して頂けるようになりました。２回・12回・22回・32回・42回の先輩方にはお忙しい中何度も、学校での会議にご参加して頂き、色々なアドバイスや、また本来であれば僕らが全てしなければならないはずの広告の依頼等もご協力頂き大変助かりました。本当にありがとうございました。

紆余曲折を経て準備を進めましたが、最後の一ヶ月は大会当日に何人の方々に来て頂けるのだろうと思いながら、不安と苛立ちの毎日を過ごしていました。しかし大会が始まってみると、たくさんの先輩方のご協力により無事盛大な会となり、最後に挨拶をした時には、感謝の気持ちと安堵の思いが込み上げてきて言葉になりませんでした。

今回世話人として同窓大会に関われたことで、非常にたくさんの経験をさせて頂くことができ感謝しております。修道生であったことに改めて良かったなと感じています。

最後になりましたが、同窓大会の開催にあたり、広告協賛・会員券販売に多大なるご協力を頂いた先輩方、何ヶ月にも渡り叱咤激励を交えつつご指導・ご指導下さった、「『２』のつく回の卒業生」の先輩方や副会長の松田様、本当にありがとうございました。

数え上げれば切りが無いのですが、この会のためにご尽力頂いた全ての方々に感謝しております。多くの方々のご協力があったおかげで、52回生も世話人としての役割を果たせたのではないかと感じております。52回生を代表して、改めて厚く御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

そして同窓大会のために、一緒に1年頑張ってくれた同級生のみんな本当にありがとう。

支部だより

「平成20年修道学園同窓会近畿支部総会」についてのご報告

代表幹事　齋　本　隆　司　（高校17回）

平成20年修道学園近畿支部総会は、去る12月13日土曜日午前11時より昨年と同様、大阪市北区堂島浜の中央電気倶楽部において開催されました。

本年の総会出席者は62名、来賓３名に講演者を加え、計66名の参加となりました。

本年は、例年に無く当日欠席が目立ちましたが、どうにか昨年を上回る出席者を得まして、まずは安堵の胸をなでおろした次第です。

出席者の中には、当日総会のあることをすっかり失念してしまっていて、業を煮やした同期生からの電話で慌てて家を飛び出し、最後の校歌斉唱時にやっとの思いで会場に飛び込むといった微笑ましい？一幕もありました。

今回の司会者は、高校35回で幹事の畠真博さん、一昨年に次いでの再登板となりました。

開会に先立ち、物故会員に哀悼の意を表し、一同暫しの黙祷を捧げました。

物故者の中には、当近畿支部の基礎作りに大いに貢献された田淵元会長や、阪神大震災以降休止していた近畿支部を天津会長と共にその再興に奔走し、10年の長きにわたりリードされてこられた安松前代表幹事も含まれているとの紹介がありました。

引き続いて、本年天津前会長の後を受け、新会長に就任した16回西原靖彦さんより開会の挨拶があり、新執行部の紹介と今後における近畿支部の運営についての抱負を述べました。

次いで新代表幹事の17回齋本隆司から、修道倶楽部閉鎖の経緯とお詫びを述べ、この間の支部活動について報告を行いました。

次に新副代表幹事の22回湯谷正司さんから会計報告、引き続き17回の新監査結城義一さんが監査報告を行いました。

引き続き、来賓のご挨拶に移りました。

まずトップバッターとして、山内中学教頭から

母校修道学園の近況をご披露いただきました。

最近の後輩達の進学意識の変化や体育館の新築計画といったニュースや、クラブ活動の状況、とりわけ陸上短距離界に新星誕生を予感させるような夢のあるお話には、文武両道の伝統校修道の面目躍如との思いを強くしたＯＢ諸兄もさぞや多かったのではと感じました。

次いで、公職も多くご多忙の中をわざわざ広島から駆けつけてくださった11回大田同窓会長からは、本部同窓会総会の参加人員増強の為の秘策とこれによる本年度総会の参加者大幅増という心強いお話や、個人情報保護法による規制強化のためしばらく中断していた同窓会名簿作成再開の情報をお伺いしました。

又、関東支部からは、19回野崎幹事長をお招きし、関東支部の現況と掛け持ちされている早稲田校友会のナンバー２としての興味深い裏話をご披露いただきました。

予定時刻を若干オーバーしましたが、午前11時半過ぎ講演の部に移りました。

今回の講演者は、17回藤岡弘昭さん、テーマは「ファッションが解れば時代の流れが見える」です。司会者の紹介によれば、藤岡さんは昭和40年に修道高校を卒業、武蔵野美術大学造形学部産業デザイン科を卒業の後、ワコール、倉敷紡績でそれぞれマーチャンダイザーや製品・素材の企画を担当される傍ら、大阪モード学園でデザイナー実践講座を担当するなどユニークな経歴の持ち主とのことでございます。

現在はＮＴＴ西日本関西人材センターに勤務される一方で、大阪学院大学においてファッションビジネス講座の非常勤講師として教鞭をとっておられます。

講演内容を簡単にご披露しますと、少し前の売れない時代からもはや「買わない時代」ともいわれる超不況下の今、「時代の相」に対する理解というものがより重要性を増しつつある。そして衣食住全般に渡る人々の多面的な欲求やニーズの裏面に秘められている深層心理の変化は、実は景気循環等を背景に変化する時代の相に大きく関連しており、その時代のファッショントレンドや流行色あるいは味覚の変化となって鋭く反映されるものだということなど、綿密なデータに基づいた説得力のあるお話を伺い、その都度相槌を打つ参加者も多く見られました。

藤岡さんは、その後の食事歓談の間も質問攻めにあい、大童の体でした。

講演会終了後、天津前会長の発声による乾杯の後、なごやかな雰囲気のうちに食事・歓談へと移りました。

その間、来賓の山内教頭、大田同窓会長、野崎幹事長を囲んでの学年ごとの同期の輪の間を、愛用のカメラを携え縦横に立ち回る当支部の生き字引的存在であります13回伊藤満さんの姿が会場のそこここに目立つようになり、総会は大きな盛り上がりを見せました。

午後１時半過ぎ、当支部の恒例となっています参加者全員がひとつの大きな輪になっての校歌斉唱へと移りました。

昨年まで力強いエールで会を締めてくれていた、今は亡き安松前代表幹事の意を慮っての天津前会長のやや迫力には欠けるものの実に味わい深いエールが、会の最高の盛り上がりへの格好のスパイスとなったようです。

最後に当たり、締めの挨拶として新副会長の16回吉井聖三さんより、各ご来賓及び講演者へのお礼と、今後の近畿支部の運営に対する協力へのお願いを述べ閉会となりました。

会終了後、三々五々家路につく者、あるいは旧交を温め尽くせず、未だ会場を去りがたい幾組かのグループが居残って暫し語らう光景が会の余韻の深さを物語っていました。

このように、次期総会の一層の盛り上がりを予感させる充実した総会となりましたことは、私どもの何よりの喜びであり、同期への呼びかけに奔走いただきました各学年幹事の皆さま、年末何かとご繁忙の中を駆けつけてくださいましたご来賓各位、有意義なお話を承った講演者、更には同窓会本部の大橋様ほか、本総会にご協力いただいたすべての皆さま方に心からの感謝を申しあげ、近畿支部総会の報告とさせていただきます。

修道同窓会近畿支部

修道同窓会近畿支部

修道同窓会近畿支部

修道同窓会近畿支部

修道同窓会近畿支部

同期会報告

えー同期生から大臣誕生

修橙会　大　西　龍　夫（高校22回）

年の瀬も押し迫った平成20年12月27日、ＡＮＡクラウンプラザホテルにて同期生68名、恩師の先生方５名をお迎えして、「斉藤鉄夫環境大臣就任を祝う会」を挙行しました。約15年前、斉藤鉄夫君は衆議院議員となり、その後再選を重ね５期目にあります。その２期目に「修橙会有志による斉藤鉄夫君を励ます会」が発足され、今回は「修橙会」と合同による祝賀会の開催でした。

ちなみに、我々修道高校22回卒業生は、その襟章の色から「修橙会」と同期会を呼んでいます。

「末は博士か、大臣か」と言われますが、この二冠をやってのけてくれた同期生が斉藤鉄夫君です。大臣就任は修道高校卒業生では初の快挙と、恩師のご祝辞もいただきました。また、君達がいるから斉藤君もより一層輝くのだとのお褒め？の言葉もいただきました。

たとえ自分自身の自慢話はなくとも、友人の自慢話が出来るのは嬉しいことと、私を含め多くの同期生が思っているようです。「わしの同級生には大臣がおるんで」などとそう簡単には言えません。

我々の年になると同期生自身の出来事で集まりがあるとすれば、それはほとんどお悔やみ事の時です。それゆえお祝い事で集まる幸せをより深く感じます。

そんな祝賀会には飛び入りやら、孫同伴の同期生やら、わいわいがやがやで２時間の宴席があっという間にお開きとなりました。

前回は党の斉藤政調会長就任祝い、今回は斉藤大臣就任祝い、果たして次回は斉藤〇〇就任祝い？。妄想、妄想、妄想。自身のことでなくとも「夢は果てしなく」……。

一人静かに鋭い眼光でお茶を飲んでいたのはＳＰさんだけでした。

特 別 寄 稿

修寿会開催報告

木 村 正 勝（元事務長：高校13回）

修道中学・高等学校の退職教職員の集まりである「修寿会」（会長・河野富士雄、会員87名）の第22回総会・懇親会が平成20年10月11日（土）、鯉城会館（県民文化センター内）において開かれ、22名の参加がありました。

遠方から、あるいは久々のご参加もあり、旧交を想い温めながらも和やかな中、在職時の修道生を大事にという強い思いやご苦労、また現在の心境など、いろいろと語られました。

また、席上、昨年度新会員の玉置勝之さんの挨拶がありました（今年度新会員の大代方美さんは欠席）。

そして、校歌を斉唱し、次回（平成21年10月の第二土曜日の10日）再会を期し、修道のますますの発展と会員の健勝を願って恒例の万歳三唱をし、帰途につきました。

真野

山本戸　竹内　木村

街道　大東　保澤

中山　田中（正）　河野　川野

木元　吉崎　平田

畠　有田　林（高）

仲井　原本

玉置　藤澤

特別寄稿

山田養吉先生の「丙寅日記」を読む（その二）

（慶応二年六月十六日～慶応二年七月七日）

修道学園史研究会　畠　　眞　實（高校7回）

はじめに

前号の「丙寅日記」を読む、その一では、慶応二年六月一日から同年六月十五日までの日記を紹介した。この部分では第二次長州戦争に突入していく過程をたどった。最初、六月五日を討ち入りの期日とし、広島藩にも岩国追手口の進軍が命じられていた。しかし、六月三日には広島藩は国境まで進軍はするが、長州へ攻め入ることはしないと幕閣に届け、四日に征長は、その名義がはっきりしないという理由で出兵しないことを申告した。そこで征長副総督宮津公松平宗秀は、彦根・高田両藩に出撃を命じ、広島藩には藩境などの警備を命じた。このようにして長州国境への進撃は結局六月十四日となった。長州との国境である小瀬川（現在、公には小瀬川。広島県側では木野川と呼称していた。旧名、大竹川）での戦いによって始まった。これより先、六月七日、周防大島への幕府軍艦の砲撃によって第二次長州戦争は始められたのである。

六月十四日、小瀬川での戦では、数に於いては劣るが、新鋭のミニエール銃を持ち、俊敏に駆けめぐる長兵歩兵軍によって彦根藩兵および高田兵は大敗する。翌十五日も激戦が繰り広げられ、長兵軍の攻撃は烈しく、井伊・榊原の軍は四十八坂など各地で退却を余儀なくされ、敗走の兵は先を争うようにして広島に逃げ帰るという状況であった。

今回の日記は、これに続く六月十六日から七月七日までを紹介する。なお、原文には句点はつけられてはないが、読みやすくするために施した。

六月

十六日　晴

朝早出　方今之形勢既迫。　姑止文武之業前日紀州兵復進陣于大野。　茲日報曰紀州兵退走。長兵既迫于廿日市云。　是以兵士奔走。　国中大駭。　因而詳之則訛伝也。　蓋長別出兵于浅原。　欲直出宮内絶紀州兵之後。　是以紀州兵退而別出兵于峠。　以北而絶其路。　復進而陣于大野。　終日終夜在学校。　申牌登城面黒田子建言吾応遣使而責長兵之暴。　論之学校奉行。　告衆曰。官使諸君赴于戰。　亦不可知故。　皆爲軍装而待官命。　乃帰傾訣別之杯而復上学路。　登城而面于松本尊翁告別。

書き下し

朝早く出づ。　方今の形勢、既に迫る。姑（しばら）く文武の業を止む。　前日紀州兵復（また）大野の陣に進む。この日報じて曰く、紀州兵敗走し、長兵既に廿日市に迫る、と。是を以って兵士奔走す。国中大いに駭（おどろ）く。因りて之を詳（しょう）すれば、訛伝（かでん）なり。蓋（けだ）し長別に兵を浅原に出（いだ）す。直ちに宮内に出で、紀州兵の後を絶たんと欲す。是を以て紀州兵退きて別に兵を峠に出す。北を以てその路を絶つ。復進みて大野に陣す。終日終夜学校に在り。申牌登城し、黒田子に面して吾応（まさ）に使を遣はして長兵の暴を責ましむべしと建言す。之を学校奉行と論ず。衆に告げて曰く、官諸君をして戦に赴かせしむ。亦知るべからず。皆軍装を爲（な）して官命を待て、と。乃ち帰り訣別の杯を傾けて学路を上る。登城して松本尊翁に面して別れを告ぐ。

語句

・方今　ちょうどいま。現今。　・姑（こ）　しばらく。とりあえず。　・駭　おどろく。
・訛言（かげん）　いつわり。うわさ。流言。
・子　成人した男子に対する敬称。　・訣別　別れ。

口語訳

朝早く出る。現今の形勢はすでにさし迫っている。

しばらく学校の文武の業を中止する。前日紀州兵がまた進軍して大野に陣を構えた。この日、報告に言うことには、紀州兵が敗走した。長州兵はすでに廿日市に迫っている、と。それで兵士が奔走している。国中が大いに驚いている。それでこのことについて、詳しく言うと流言である。思うに、長州は（本隊とは）別に（佐伯郡）浅原に兵を出す。紀州兵の後続を断という狙いである。それで紀州兵は後退して峠村に別隊を出す。北への路を断つ。また進撃して大野に陣取る。終日終夜学校に居る。午後４時頃登城して黒田さんに面会し、私はきっと使者を送って長州兵の暴挙を責めさせるだろうと建言する。このことを学校奉行と論議する。人々に告げて言うには、藩庁は、諸君を戦の場に行かせようとしている。その理由は知ることができない。諸君は戦の装いをして藩庁の命令を待ちなさい、と。そこで帰って別れの杯を傾けて、学校への路を上る。登城して松本尊翁に別れを告げる。

参考

・長兵の暴

角井菊男著「征長の役　安芸口戦」（近代文芸社）の記述によると、「遊撃兵の隊長であって、この方面の作戦主脳である河瀬安四郎より六月十六日付の山口政治堂への第一報では、予想外の大勝利を詳細に述べた後に『……何分岩（国）兵疎暴実にはなはだしき戦争は山上より発砲のみ。小銃は余分打たず位にて矢掛りにも出会わず。既に敵兵敗残の後、ただただ敵の諸器械を奪うにてはこれなき民家の諸物衣類など悉く取候由につき、その物筋へも追々申し込み候えども、今に十分には号令行き届かず、実に監物様の御家来に何故かようの暴行仕る者多く候やと遺憾の至りに存じ奉り候…』とあり、これは岩国の家臣団は領外への進出が禁じられていたのに、その方の訓練の行き届かない民兵団が勝利に酔っての行動と思われ、なお戦中の風聞の誇張があったと考えられる。」とある。

・学校奉行

「頼春水が作成した『学制』（草稿）によれば、学問所の役職としては、総奉行（総数　一人）、支配（教官長、二人）、元締（教官検校、二人）、儒者（教授、六人）、素読ノ師（句読師、二〇人）、見廻り（士列学監・御歩行学監・各四人）目付（大小監察、二人）（中略）で、その後役職・人数とも変更があつたようで、幕末期には学校奉行（一人）、添奉行（一人）、書物奉行（一人）、教頭（四人）、教授官（八人内外）、吟味役（二人）、事務局詰（四人）、書記局詰（六人）、学事方（定員なし）、同見習（同上）、句読師（二〇人）、門衛などとなっている。これらを統轄する者として用人のうちから二名が学問所掛に任命された。このうち教頭は教授官（儒者）のうち年功を積んだ者が当たり、格別の者は側用人の格にまで進め、禄高も三百～四百石を支給した」。（「広島県史」　近世Ⅰ）・「広島市史」によると、学問所創設時代の職制が後代において改廃をなし、天保・弘化の頃の職制になっていたとある。そして、「学問所奉行」については、「学問所の事務を総轄監督す、此の職を奉ずる者は概ね他の職格を帯びて此職に専任せらるる、職給として足軽料二人（足軽一人料は米四石・二人扶持の比例にて給す）を給す。」ある。

十七日　晴

朝自学校帰。　以昨通宵不能快眠而仮睡。　巳牌堀禎次郎君自学校以書招余　与松子兄。乃共去。

蓋僕与松子兄論可以学校中爲一隊。　故招二人而論之也。　論是。乃上書而乞之。　未牌前帰。

又仮眠。　黄昏赴于松本氏。　夜帰時子牌。乃復赴獄府面家大人。復帰而上学。

書き下し

朝学校より帰る。昨通宵快眠すること能わざるを以て仮眠す。巳牌堀禎次郎君学校より書を以て余を松子兄と共に招く。蓋し余松子兄と学校中を以て一隊と爲すべきことを論ず。故に二人を招き、之を論ずるなり。是を論ず。未牌前帰る。亦仮眠。黄昏松本氏に赴く。夜帰りし時、子牌。乃ち復獄府に赴き、家大人に面す。復帰りて上学す。

語句

・通宵　よどおし。一晩中。　・蓋し　思うに。つまり。

第二次長州戦争の戦場略図

口語訳

朝学校より帰る。昨日一晩中快眠出来なかったので仮眠する。午前10時頃堀禎次郎君が学校よりの書状で私と松本さんの兄とを招集する。思うに私と松本さんの兄とは学校全体で一隊を編成することを論じているからなのであろう。だから二人を呼んでこのことを論議しようというのであろう。(学校で) このことを論議する午後2時頃帰る。また仮眠する。夕方松本氏の所に赴く。夜、帰ったのは午前0時頃。そして獄庁に行き、父上に面会する。帰ってまた学校に行く。

参考

・獄府面家大人

水山烈の「山田十竹翁小伝」によれば、山田養吉先生の父については、「父は三太という。郡の歩行目付(かちめつけ)であった。人々の訴え事はよく耳を傾け、公平な裁きをすることで知られていた。」とある。

・堀禎次郎

広島藩　合力組（儒医）　少属（機務）（「芸藩輯要」）

十八日　晴

朝在学校。　官有命。　使余護不動院之砲薬。　乃與鈴木赴岡村氏欲面于主人。　辞曰今将上学　請子上学。　余乃帰。　結髪。　復上学待岡村子。　良久不至。　子牌前始至。　告于此以官命　復輿鈴木子赴于都府。　面于奉行佐藤子。　命于余以伍長。　復共赴学校。　復輿藤田氏帰。　喰午飯而復共去于不動院。　與他之伍長議事而夜帰。　又赴于郡府面于佐藤子議事。　終而面于家大人而帰。　茲夜有官命而免使余護不動院砲薬。

書き下し

朝学校に在り。官命有り。余をして不動院の砲薬を護らしむ。乃ち鈴木と岡村氏の所に赴き、主人に面せんと欲す。辞して曰く、今将に上学せんとす、子に上学を請う。余乃ち帰る。結髪。　復上学し岡村子を待つ。良久(しばらく)至らず。子牌前始めて至る。此に官命を以て告ぐ。復鈴木子と都府に赴く。奉行佐藤某に面す。余に命ずるに伍長を以てす。復共に学校に赴く。復藤田氏と帰る。午飯を喰らひて復共に不動院に去(い)く。他の伍長と事を議して夜帰る。又都府に赴き、佐藤子に面し事を議す。終わりて家大人に面して帰る。この夜、官命有りて不動院砲薬の護りを免ぜしむ。

語句

・去　さる。ゆく。(その場から引き下がって他所へ行く。　・伍長　五人を一組にしたものの長。

六月二十二日の参考のところに示しているが、農民組の編成に当たっては一般の農民五人に伍長一人を配している。ここでは学徒をもって一隊とするという考えのようであるから、学徒五人のとりまとめとしての伍長であるのか、定かではない。いずれにしても一般人を兵士として訓練しようとしているのであり、その取りまとめに山田養吉を任命したのであろう。

口語訳

朝学校に居る。藩庁からの命令がある。私に不動院にある砲弾を警護するようにということである。そこで鈴木と岡村氏のところに赴き、主人に

面会したいと言った。そのことを断って、今丁度学校に上がろうとしていたところだ。あなたに学校に行くようにお願いしたい、と言う。そこで私は帰る。結髪する。また学校に上がって岡村さんのやって来るのを待つ。しばらくやって来ない。午前0時前頃になって、やっと到着した。彼に藩庁からの命令のことを告げた。また鈴木さんと都庁に赴き、奉行佐藤某氏に面会する。彼は私に伍長を任命する。また岡村さんと学校に赴く。また藤田さんと帰る。午飯を食べて、また一緒に不動院に行く。他の伍長とあれこれ相談して夜帰る。また都庁に赴き、佐藤さんに面会して相談事をする。それが終わって、父上に面会して帰る。この夜藩庁からの命令があって、わたしの不動院の砲薬の警護の任務を解いた。

参考

・不動院

広島市東区牛田新町３丁目にある。広島県護国教団。新山安国寺と号す。本尊は薬師如来。不動院本堂は国宝。福島正則が広島城主として入国したとき、真言宗に改宗、本坊の本尊に不動明王像を安置したため不動院と改称した。(「広島県地名大辞典」：角川書店による)

＊鐘楼・楼門・梵鐘が国の重要文化財、不動院文書が県の重要文化財に指定されている。

十九日　晴

朝自卯牌前大礮声轟于地。　結髪。　至于刀工家制袴家。　轉而赴于静専寺。　拝浅児之墓而帰。午後草贈于家大人之書。　夜上学宿。　茲日紀州兵戦于大野。　蓋紀州兵之屯于大野也。　其中軍在業者山南麓。　其国老水野大炊守陣于西教寺而在中軍之東。　中軍之西陣于県令之家者亦紀兵也。

三軍既陣于南麓。　復退而設大礮于三所。　将不日追長兵。　茲日旬九日卯牌紀兵未起而忽有兵自山上発大礮而下撃。　紀兵大駭失措。　然発大礮而防之。　礮遠而丸不達　　終為列而仰攻之則

而長兵不独在業者山而已。　而其後山滝山上連兵者七百余人。　水野子見之而直繞而出于滝山之背。撃援兵之後。　滝山之兵顧而敗走。　是以業者山之兵亦走。　不知其所之。　乃整兵而出于大道而西。　忽有兵当于路。　不知為孰兵。　彼揺旗。　紀兵曰彼揺旗也異于我。　敵也。　則放砲而撃之。　急迫于此長兵。　不能支。　復走。

紀兵追之放大礮而撃之。　死者三十有余人。傷人不知数。　已牌而戦終。　吾兵死者三人。傷人不知数。　茲日家大人乗駅駕而去于戦場。八人舁而廿日走云。

書き下し

朝卯牌前大礮声地に轟く。結髪。刀工の家、袴を制する家に至る。轉じて静専寺に赴く。浅児の墓を拝して帰る。午後家大人の書を草す。夜学宿に上る。この日紀州兵大野に戦う。蓋し紀州兵、之大野に頓するなり。其の中軍業者山南麓に在り。其の国老水野大炊守西教寺に陣し、中軍の東に在り。中軍の西、県令の家に陣する者も亦紀兵なり。三軍既に南麓に陣す。復退きて大礮を三所に設す。将に日ならずして長兵追う。この日十九日、卯牌紀兵未だ起きずして忽ち兵の山上より大礮して下撃する有り。紀兵大いに駭ろき措を失す。然れども大礮を発して之を防ぐ。礮遠くして丸達せず。終に列を爲して仰ぎ之を攻むれば、則ち、(而)

長兵独り業者山のみに在らず。而して其の後山、滝山上に兵を連ねる者七百人。水野子之を見て直ちに繞りて滝山の背に出づ。援兵の後を撃つ。滝山の兵顧みて敗走す。是を以て業者山の兵も亦走ぐ。其の所、之を知らず。乃ち兵を整えて大道に出でて、西す。忽ち兵の路に当たる有り。孰れの兵爲るかを知らず。彼旗を揺るがす。紀兵曰く、彼の旗を揺るがすや、我と異なる、敵なり、と。則ち砲を放ちて之を撃つ。急に此の長兵に迫る。支える能はず。復走す。紀兵之を追ひ、大礮を放ちて之を撃つ。死者三十有余人。傷人数知らず。已牌にして戦終わる。吾が兵死者三人。傷人数知らず。この日家大人駅駕に乗りて戦場に去く。八人舁きにして廿日走ると云う。

語句

・静専寺　峰龍山と号し、一に「上の坊」と称す。寺町光福寺の南隣にあり、本尊は、阿弥陀如来なり。開基覚超は本願寺蓮如上人に帰依随従し、後、佐東郡金山竜原の丘上に一宇を草創し、峰竜

山・上之坊・浄専寺と号す。金山落城の後所々に移転し、一代宗祐の時に至り、同郡上安村に堂宇を建立せり、その後天正十七年広島開府の時、仏護寺と共に庁からの命令広瀬村に賜はりしが、福島氏時代に至り、慶長十四年替え地を今の所に賜はり、之に移る。(「広島市史」社寺誌)

この日録の他の箇所では「浄専寺」ともしている。

・国老　江戸時代、大名の領国で主君の留守を預かる家老。国家老。　・県令　明治四年(1871)から十九年までの県の長官の呼び名。十九年の地方官制公布により知事と改称される。このように説明されているが、この日記は慶応二年のことであるから、ここでいう「県令」とどういうつながりになるのかよく分からない。　・不日　日ならず、ふじつ、と読み、幾日もたたないうちを表す語。まもなく。ちかぢか。　・旬九日　旬は十日。十日間。したがって、十九日。　・滝山　大野の妹背(いもせ)の滝のある山か。　・繞る　めぐる。廻りをまわる。とりまく。　・失措　「失措す。あるいは措を失す」とよむ。処置をあやまる。とりみだすこと。　・駅駕　宿駅に用意されていた駕籠のことか。(参考：古代における駅伝制度では、「駅馬」が配されていた。駅制と並んで律令国家のもとで機能した交通制度に「伝馬」があった。＊「日本歴史大事典」による。)

・舁(か)き　ものを肩にかけて運ぶ。特に二人以上で肩にかつぐ。

口語訳

朝午前6時前頃、大砲の大音声が地に轟く。結髪。刀工の家、袴をつくる家に行く。行き先を変えて次ぎに静専寺に赴く、浅児の墓に参って帰る。午後父上への書状を書く。夜学校の宿舎に行く。

この日、紀州兵が大野で戦う。つまり、紀州兵は大野に駐屯しているのである。紀州兵の中軍は業者山南麓にいる。紀州の国老水野大炊頭は西教寺に陣地をおき、中軍の東にいる。中軍の西、県令の家に陣を敷いているものもまた紀州兵である。三軍はすでに南麓に陣取っている。また退いて大砲を三カ所に設置する。すぐさま長兵を追撃しようとしている。この日、十九日、午前6時頃、紀州兵はまだ起きておらず、たちまち兵が山上より大砲で下を向けて砲撃してくるということがあつた。紀州兵は非常に驚いてどうしてよいのか、対応に窮した。しかし、大砲を発砲してこれを防いだ。(大砲は敵より位置が)遠く弾丸が届かない。ついに列をつくり、山上を仰ぎ、攻撃すると、長兵はただ業者山にいるだけではなかった。業者山の後ろの山滝山の上に七百人の兵を連ねている。水野氏はこれを見て、直ぐに山を廻って滝山の背後にでる。援軍の兵の背後を攻撃する。滝山の兵は振り返って敗走する。そこで業者山の兵もまた敗走する。今何処にいるのかその場所が分からない。そこで兵を整えて大道に出て、西の方向に向かう。たちまちその路で兵に出くわす。その兵が敵か味方か、いずれの兵なのか分からない。紀州兵が、あの兵の旗の振り方といったらわれらのものとは違う、敵兵だと言う。そこですぐさま発砲してこれを銃撃し、この長兵に急迫する。長兵は支えきれないで、また敗走する。紀州兵はこれを追撃し、大砲を撃つ。死者三十人を越える。傷を負った者は数知れず。午前10時頃戦は終了した。わが藩兵の死者三人。この日父上は駅駕で戦場に行く。八人舁きで二十日走らせるということだ。

参考

・水野大炊守

水野大炊の守忠幹　和歌山の支藩、新宮藩三万五千石の城主、紀州藩の付家老(江戸時代、監督や補佐などのために、幕府から親藩へ、または、大名の本家からその分家へつかわされている家老職。ふつう、先祖代々つかえている譜代家老よりも上位におかれていた。)。

・この日の戦闘に関する「芸藩志」の記録

在芸長兵は大野村屯在の東軍(幕府軍・諸藩の兵士)を攻めんと欲す。乃ち隊長河瀬安四郎等は銃砲二兵を分けて二部となし道を分けて進み之を挟撃せんと謀れり。依りて一部は本隊と遊軍の二隊になして小方村方面より四十八坂(大野四十八坂：厳島の対岸、大野町から西の玖波村へ至る山陽路の坂路。高低曲折が多い。[「村上家乗」広島県立文書館資料集3])を越えて大野村の追手に向ふ。一部は松ケ原を経て大野村の搦手に向へ

り。暁七時追手の長兵は四十八坂を越え大野村口に至り、農家に放火す。蓋し此の放火は搦手長兵へ進撃を通報するが為めなるべし。是に於いて忽ち大野村後面松ケ原間道より長兵襲来し山上より大小砲を激射して水野大炊頭の本陣（西教寺）を襲撃す。大炊頭は親ら兵を督して応戦す。其の戦は最激烈なり。大炊頭も亦自ら砲を射撃するに至る。暫くして長兵遂に破る能はず農家に放火し松ケ原を指し狼狽遁れ走る。兵器の路傍に遺棄する頗る多し。是より先き幕兵及び他の諸兵は西教寺の左方に進出して散開（広くちらばること）し以て本道四十八坂の敵兵と対戦し大に長兵を破りて進む。然るに搦手の長兵已に潰走せしを以て水野家兵は敵を逐ふ。二十町余にして皆之を捨て、転じて四十八坂の後面に向ひ、松ケ原間道より長兵を破りて進み、両道の東兵は遂に玖波村に闖入（押し入ること）して一旦長州の番兵を駆逐せしに之を捨て、大野村に凱旋す。此の日戦争頗る激烈にして東西両軍の死傷頗る多し。而して長兵は大敗せしといへども其の領内に退かず。東兵は戦捷（戦争にかつこと）を得たりと雖も玖波村を拠守（たてこもり、そこを拠点として防ぎ守ること。）せずして後大野村を守備す。故に東西対陣の状況は依然なり。

廿日　晴

茲日家大人自大野帰。　幕兵別手者丹州伯耆公之兵屯于峠。　茲日巳刻斥候報曰見二三之長兵。

即整兵追之至于河津原。　長兵方築壘于二山之間。急以大礮撃破之。　彼亦整兵而迎乃退兵而待之。　別分兵于東西而伏于二山之外。　彼離営而進交放砲而戦。　良久幕兵偽而退。　長兵交進則伏兵出于二山之北而急撃之。　長兵顧而動。　幕兵皆捨砲以短兵返此。　長兵大敗走。　追而斬之者二十有八人。　其受丸而死者不知数。　当此時無吾木村子過則麕殺之也。可憾也。

書き下し

この日家大人大野より帰る。幕兵別手なる者、丹州伯耆公の兵峠に頓す。この日巳牌斥候報じて曰く、二、三の長兵即ち兵を整え、之を追ひ、河津原に至る。長兵方に壘を二山の間に築かんとす、と。急ぎ以大礮を以て之を撃破す。彼も亦兵を整へて迎ふ。乃ち退きて之を待つ。分兵東西に別れて二山の外に伏す。彼営を離れて進み、交放砲して戦ふ。良久幕兵偽りて退き、長兵交進めば、則ち伏兵二山の北に出でて之を急撃す。長兵顧みて動ず。幕兵皆砲を捨て、短兵を以て此に返る。長兵大いに敗走す。追ひて斬の者二十有八人。其の丸を受けて死する者数を知らず。此時に当たり吾木村子の過無くば、則ち麕殺之なり。憾むべきなり。

語句

・壘　とりで　・営　陣地　・丸　たま。弾丸　・過（あやまち）　あやまち。失敗。
・麕殺（おうさつ）　みなごろしにすること。
・憾（うら）む　残念に思う。

口語訳

この日父上が大野より帰られる。幕兵の別隊、丹後宮津公の兵士が峠村に駐屯している。この日の午前10時頃、斥候が報告して言うには、二、三の長州兵の姿が見える、と。そこですぐさま兵を整えて、この長州兵を追って河津原にたどり着いた。長州兵は二つの山の間に砦を築いている。急いで大砲をもってこれを撃破する。長州兵もまた隊を整えて迎え撃つ。そこで退いてこの隊を待つ。これとは別に東西に兵を分けて、二つの山の外に伏している。彼らは陣を離れて進み、互いに大砲を放って戦う。しばらくして幕兵はわざと退くと見せかける。長兵こもごも進んで来るので、伏兵が二つの山の北面に出てこの長兵を急撃する。長兵は振り返り見て動揺する。幕兵はみな大砲を捨て、刀剣でもってこの長兵に立ち向かう。長兵は大いに敗走する。それを追い斬り殺した者は二十八人余り。弾丸を受けての死者は、その数が分からない。この時、わが藝州藩の木村氏の過ちが無ければ、敵をみな殺しにできたはずである。残念に思わずにはおられない。

参考

・丹後宮津公

幕府老中　本荘（松平）伯耆守宗秀（丹後宮津

公）慶応二年五月二十八日、小笠原長行に代わり、征長総督紀州藩主徳川茂承を補佐して軍務を指揮することを命じられて、大坂より軍艦で広島に入る。

・木村子の過　「芸藩志」によれば、「二十日、長兵は浅原口より進入昨十九日に至りては河津原付近の山麓に至り各所へ胸壁（とりで）を建築す。宮津藩兵は其の謀報を得て巡邏（巡回警備すること）として該方面に出て其の状況を偵察せんと欲す。依りて前夜三更（午前0時頃）より特に兵を挺して（先立てて）同村付近に至り之を窺ふ。而して該砲台の竣工せざるに先立ち之を撃破せんと欲して乃ち兵を分けて三隊と為し急に敵の陣地に突入し之を薄撃（迫撃：肉薄して攻撃すること）す。此の時長兵は槙ケ峠に砲台を築き前日の如く就役（任務につくこと）し交々西福寺に入り休憩す。十九日夜半工事未だ其の竣りを告げざる時に忽ち宮津藩兵並び幕府別手組等凡そ三百余人は大砲一門を以て襲来するに会す。依りて之を迎へては防戦す。東軍は阪麗なる（坂がなだらかなの意か）地区に拠り銃隊を左右の山上林間等へ布列し銃を発する。雨の如し。其の大砲は焼弾榴弾を連発し其の勢ひ頗る劇し。故是長兵も兵を分けて二つと為し一隊は本道の東軍に当たり、一隊は右側の山上に拠り互いに激戦し、遂に両軍は短兵相接す。然れども長兵遂に破れて支ふる能はず浅原村の農家に放火して僅かに遁れて防州玖珂郡に走る。此の戰や東軍は長兵三十五人を斬りしといへども東軍も十余人の死傷なりといふ。此の日宮津藩等大に長兵を破り追撃するや、峠村に屯在せし木村外記（小姓組番頭なり。）に向けて間道の後衛を依頼す。外記之を許諾して進まず。将に兵を麾て退かんと為す。偶々二川主税は兵を将て来たり其の後衛の依頼あるを聞くや直ちに進みて陣を友田村に移し、同地方の間道を守衛す。宮津藩兵は長兵の潰走（戰いに敗れてちりぢりに逃げること）を視て之を長駆（遠くまで敵を追い続けること）せんと謀りしといへども元（もともと）偵察の爲めに来る所にして戰闘はその目的にあらざるを以て中途より其の陣営に帰れり。該報告の広島に達するや外記の処置其の宜を得ざるを以て之の職を免除するに至る。

六月廿一日小姓組番頭木村外記の職を免じ片岡大記をして之に代わり其の兵を指揮せしめ上田主水に小深川村を守衛せしむ。」と記されている。

廿一日　　雨晴半

二三日之間多事。　卒々無暇于細録。　姑挙大綱。

書き下し

二、三日の間、落ち着かなくて細録に暇無し。姑く大綱を挙ぐ。

語句　卒々　あわてていて、落ち着かないさま。

口語訳

二、三日の間、落ち着かなくて細かく記録する時間ない。しばらく大まかなことを挙げておく。

廿二日　晴　夜大雷大雨

早起将赴于廿日市。　有疾而不果。　蓋近頃長兵頻迫于西辺而為乱暴。　而官兵不能追之。　不堪于切歯。欲招集義民而親率以奇兵迫之。二三日間熟計思慮欲必遂其志。　然無募由之。　乃見郡奉行佐藤某。　語之。某善吾意曰子不用募吾民将以農兵付之于子。　卒（「率」の誤記か）之以成事。　然余退以為。　余未曾学兵法。　而妄卒兵則殺人。　無為也。　家大人亦以為然。且曰有善兵之荘平者不如従于此。　而学乃請之官。　官許之。　且有密命而荘平在廿日市。　率農兵故欲従于此也。

書き下し

早起し、将に廿日市に赴かんとす。疾有りて果たさず。蓋し近頃長兵頻る西辺に迫りて乱暴を爲す。而るに官兵之を追ふ能はず。切歯に堪へず。義民を招集し奇兵を以て親から之に迫らんと欲す。二、三日間熟計思慮し、必ず其の志を遂げんと欲す。然るに募りに由無し。乃ち郡奉行佐藤某に見ゆ。之を語る。某吾が意を善して曰く、「子吾が民を募るを用ひず、将に農兵を以て之を子に付けんとす。之を率て以て事を成せ。」と。然るに余

退きて思へらく、余未だ嘗て兵法を学ばず。而るに妄(みだ)りに兵を率れば、則ち徒(いたずら)に人を殺し、為す無きなり。家大人も亦思えらく、然りと。且つ曰く、善兵の荘平なる者有り、此に従ふにしかず。而して学乃ち此れを官に請ふ。官此許す。且つ密命有りて　荘平廿日市に在り。農兵を率る。故に此れに従はんと欲するなり。

語句

・切歯　歯をくいしばること。はぎしり。きわめて無念に思うこと。　・疾　病気。　・義民　正義のために自分の命をかけてつくす人民。特に近世百姓のために一命をなげうって権力者と戦う人をいう。　・奇兵　敵の不意をうつ軍隊。　・由　手だて。方法。

・善（よみ）する　よしとする。めでたたえる。・農兵　平時は農業に従事して事ある時には、武装して兵となるもの。江戸末期、諸藩が農民を徴集して組織した軍隊。

・率　原文には「卒」の文字が書かれている。しかし、「卒」では、文意が通りにくい。勝手に判断することは、慎むべきであるが、前後の文脈から考えて「率」とすべきところ、音が同じで字体も近いところから「卒」とされたのではないかと考えみた。「率」の意味は、「ひきいる。まとめて引き締める。」である。一応このように解しておく。

口語訳

早く起き、廿日市に赴こうとする。病むことがあって果たせなかった。思うに最近長兵が非常に西のあたりに迫ってきて乱暴を働いている。しかしながら官軍はこれを追い払うことができないでいる。歯ぎしりして無念に思う。義民を招集して奇兵でもって自ら指揮してこの長兵を追い払いたいと思う。二、三日、じっくり計画を練り、考えて必ず思いを遂げたいと思う。しかし義民を募(つの)ろうとしも、その手だてがない。そこで郡奉行佐藤某氏に会見する。某氏は私の思いを良しとして、「あなたは、わが民を募集するということをせず、農兵をあなたに付けようと思う。これを率いてあなたがしようとしていることを実行しなさい。」と言ってくれた。しかし、一歩引き下がって考えてみるのにわたしは未だ兵法というものを学んだことがない。それなのにみだりに兵を率いるならば、それはすなわち、いたずらに人を殺し、何の役にも立たない。父上もまた同じよう思われ、その通りだ、と。さらに付け加えて言われるには、優れた兵で、荘平という者がいる、この者の指導に従うのに越したことはない、と。それで学校はこのことを藩庁に請願した。藩庁はこれを許可した。その上、密命があって荘平は廿日市に居る。農兵を率いている、ということである。したがってこれに従おうと思うのである。

参考

・郡奉行

「芸藩輯要」の藩士名鑑（御役人之章程）によると、「日々登城。組外御役人ヲ支配ス。宗旨々義担当ス。郡中一切事ヲ担当セラル、これにより郡廻リ御代官ノ事務ヲ聞ク。郡吟味役所アリテ郡中ニ起リシ罪人ヲ吟味ス。」と説明されている。

「広島藩における近世用語の解説」（六訂版）よれば、「淺野藩政では、領内十六郡に対する農政の総括者（但し、勘定奉行の所管に係るものを除く）として、二名の郡奉行を置き、宝永元年（1704）両名の支配郡を二分割した。郡奉行は用人から選び、兼務させ、郡廻りや代官の行政事務の統轄・郡方吟味役所における郡中犯罪人の吟味等にあたった。なお、郡奉行は宝暦九年（1759）郡代と改称された。しかし、「青枯集」の記事の中に「郡奉行」名での「触」があるので、「郡奉行」名は以後も使用されていたと思われる。」とある。

・荘平なる者

佐伯郡下村出身の農民の木本壮平は、長州藩で、荻野流練兵式を練習して帰村した。広島藩は壮平を応変隊調練の教授役に抜擢し、郡役所支配、五人扶持として抱えた。（「村上家乗」慶応二年：広島県立文書館資料３　）

・「村上家乗」慶応二年八月廿六日の記述

「（前略）敬次郎今日応変隊調練見物に行く。右応変隊というは、宮内辺りの百姓惣平と申す者同所立ち去り、長州へ参り、?(はたら)き致し居り候うち、斯くの如き時勢になり、隊頭の家へ入り

込み、農兵隊調練の作法を密かに覚悟致し候ところ、せんだって戦争頃より廿日市へ帰り、同所にて農兵の頭を致し、調練の指揮致し候ところ、中々善き指揮致し候につき、近頃当所へ呼び寄せ、農兵を募り、応変隊と唱し、その調練を申し付けられ、この節不動院・日通寺辺りにて山河の稽古致し、殊の外甲斐甲斐しき事にて、見る人皆感心致し候由なり。」

・農兵

＊「廿日市町史」（通史編上）から概略を抄出してみる。

佐伯郡では、元治元年（1864）２月、代官所頭取石井惣兵衛らが割庄屋を集め、佐伯郡において農兵組の配備・構想と規則を示し、その組織化が具体的に進められることになった。その目的は、それまでのように海防だけでなく、郡村の治安維持のため農民の軍事力を組織し、藩の軍事力不足を補完しようとしたものであった。そのため代官の郡中在勤を決定し、「郡々枢要之地」に勤番所を設置し、農民の武芸修練と農民組の結成にあたらせた。農民組は、十五歳～三十歳までの年齢層を中心として、「亭主」以外の子弟をも数多く含み、村役人層の優位性のもとに既存の村落階層秩序を生かしつつ、農民の諸階層を包摂して構成された。農民組の編成は、一般の農民五人に伍長一人を配して六人編成で小組とし、四つの小組に組頭一人を配して二五人編成で大組、四つの大組に頭取一人を配して一〇一人編成で一備、二～四備に侍中一人を配して一屯所とした。伍長・組頭までは農民身分から取り立てられたが、頭取以上には武士身分の者が配された。このことは、農民組の中に「世直し」層の影響力が入ることを注意深く排除しつつ、中間指揮者には農民を登用することによってその参加を促し、最終的な指揮権は封建領主層が保持しようとしたことを示している。（文久三、四年当時、佐伯郡の農兵人数は1500人。うち、廿日市組200人。小方組200人。玖波組200人。津田・玖島組300人。草津組200人。能美島中組400人。）

廿三日　　雨

洪水漲。　福山公之破于石州路也。　尽失輜重　棲于一山上。　長兵四面囲之。　福兵悉脱。白赤短掛而掛樹之。　長兵以爲兵也。　列砲而打之。　福兵私下山以短兵急撃之。　長兵大敗。死者不知数云。

書き下し

洪水漲（みなぎ）る。福山公、之（これ）石州路に破るなり。尽（ことごと）く輜重（しちょう）を失ふ。一山に棲（す）む。長兵四面之を囲む。福悉（ことごと）く脱す。白赤短掛けて（？）之を樹に掛く。長兵以て兵と為（な）すなり。砲を列して之を打つ。福兵私（ひそか）に下山し短兵を以て急に之を撃つ。長兵大敗す。死者数を知らずと云ふ。

語句

輜重　（しちょう）軍隊に附属する糧食・被服・武器・弾薬などの軍需品の総称。

棲む　すむ。ねぐらに憩うようにゆっくりとやすむ。ねぐらを設けてすむ。

白赤短掛而掛樹之　どういうことかよくわからない。前後のつながりから考えると、赤や白の短い布きれなどを樹にかけて兵士の軍服に見せかけたのか、と推察してみた。

口語訳

洪水が溢れている。福山藩公は石州路で破れた。ことごとく糧食、被服、武器などの軍需品を失い、ある山上を居場所にしていた。長兵がこれを四方から包囲した。福山藩の兵はことごとくこの包囲から脱出した。白赤の短を掛け（？）、これを樹に掛けた。長兵はこれをもって兵であると見なした。銃を連ねてこれをめがけて発砲した。福山藩の兵は密かに山を下り、刀でもって長兵を急撃した。長兵は大敗した。死者の数は分からないと言う。（この日の記述のある、頭書（かしらがき）に「真偽（しんぎ）難辨（べんじがたし）」［本当か嘘なのか、判断がつきかねる。］とある。

参考

福山公　阿部主計頭正方（あべかずえのかみまさかた）

廿四日　雨晴相半

疾漸癒。　幕府之攻大島也　破甲則乙進破乙則丙進　輪運無極　終不能援而尽退云

書き下し

疾漸く愈ゆ。幕府の攻、大島なり。　甲破れば乙進み、乙破れば則ち丙進む。輪運極まり無し。終に援すること能はずして尽く退くと云ふ。

語句

・輪　順序よくめぐる。順番にする。　・運　めぐる。めぐらす。

口語訳

病気がやっと治癒した。幕府の攻撃は大島である。甲の部隊が敗れると、かわつて乙の部隊が進み、乙の部隊が敗れると、丙の部隊が進む。こういった具合で、この巡りの繰り返しは、極まりがない。結局支援ができず、ことごとく退いたという。

廿五日

疾癒。　始出赴于佐藤氏欲面主人。　主人辞曰昨吾子死以故辞云。　乃弔而帰于郡府面于家大人。

帰路過于馬埒調馬。　午眠。　赴松本氏。　黄昏過于竹内氏。

書き下し

疾愈ゆ。始め佐藤氏に赴き、主人に面せんと欲す。主人辞して曰く、昨吾が子死す。故を以て辞すと云ふ。乃ち弔して都府に帰る。家大人に面す。帰路馬埒に過(たちよ)り調馬す。午眠。松本氏に赴く。黄昏竹内氏に過(たちよ)る。

語句

・埒　馬場の周囲に設けられた柵。「馬埒」というのは、馬場のことか。　・調馬　馬を乗りこなすこと。

口語訳

病気が癒えた。はじめ佐藤氏のところに赴き、主人に面会しようと思った。主人はそれを断り、昨日わが子が死んだ。だからそれで断るのだ、と言う。そこで、弔意を述べて帰る。郡府に帰り、父上に面会する。帰路、馬埒に立ち寄り、調馬をする。午眠。松本氏に赴く。夕刻、竹内氏に立ち寄る。

廿六日

朝自松本氏帰。　赴于学校。　午眠。　未牌復赴学校。　以家大人賜書之故登城面于佐藤君。帰路赴于郡府、面家大人。　復帰于学校直。　直于演武場。　終宵聴愚談。　不被寝。

書き下し

朝松本氏より帰る。学校に赴く。午眠。未牌復た学校に赴く。家大人書を賜はるの故を以て登城し、佐藤君に面す。帰路都府に赴き、家大人に面す。復(また)学校に帰り、直(ちょく)す。演武場に直す。終宵(しゅうしょう)愚談を聴く。寝られず。

語句

・直　あたる。ちょうどその番にあたる。

・演武場　城内に「講武所」という所がある。「演武所」というものは見あたらぬ。また、日記に「松原演武場」という記述もあることから、「講武所」のことではないかと推察される。「村上家乗」慶応二年　広島県立文書館資料集３」の注によれば、講武所　文久三年（1863）正月、軍制を西洋式に改革するに当たり、郭内本丸より内濠を挟んで北東、東御門の向かい、学問所邸内の空き地を西洋式練兵場とした。五月に剣槍場と合わせて講武所と称することとした。翌元治元年（1864）九月に城北に松原講武所（現在の基町高校の位置にあった。兵制の改革に徒もない、城の東にあった講武所が手狭となり、城北にあった調馬が拡張されて練兵場になり、このように名づけられた。）ができると、従来の講武所は東講武所と呼ばれるようになった。

・終宵　一晩中。　・愚談　ばかばなし。

口語訳

朝、松本氏より帰る。学校に赴く。午眠。午後４時頃また学校に赴く。父上が書状を賜るというので登城して佐藤君に面会する。帰路郡役所に赴き、父上に面会する。また学校に赴く。当直をする。演武場に宿直する。一晩中、ばか話を聞く。眠れない。

廿七日　晴

朝自演武場帰。　赴于深町氏。　以昨通宵不能快眠仮眠至午時。

書き下し

朝演武場より帰える。深町氏に赴く。昨通宵快眠能わざるを以て仮眠午時に至る。

口語訳

朝演武場より帰る。深町氏に赴く。晩夜通し快眠能出来なかったので仮眠して正午に至る。

廿八日　晴

朝調馬。　路過于深町氏。　午後直于演武場。　夕帰。　松斎兄松子兄来。　夜赴于木原氏。約借砲。

書き下し

朝調馬。路深町氏に過る。午後演武場に直す。夕、帰る。松斎兄松子兄来たる。夜木原氏に赴く。砲を借りるを約す。

口語訳

朝調馬をする。帰路、深町氏ところに立ち寄る。午後演武場で当直する。夕方帰る。松斎兄松本氏の兄がやって来る。夜、木原氏のもとに赴く。銃砲を借りることを約束する。

二十九日　雨晴相半

終日悠々。　夜赴木原氏。　借馬上砲而帰。又上学。　子牌前帰。

語句

・馬上砲　馬上で撃てる銃砲のことか。

書き下し

終日、悠々と過ごす。夜、木原氏に赴く。馬上砲を借りて帰る。又上学す。子牌前帰る。

口語訳

終日、悠々として過ごす。夜、木原氏の所に赴く。馬上砲を借りて帰る。また学校に行く。午前0時前ごろ帰る。

七月

朔　晴

終日騒々。　不可録。　夕赴于松本氏。

書き下し

終日騒々。録すべからず。夕松本氏に赴く。

口語訳

一日中、騒々しい。記録出来ない。夕方、松本氏のところに赴く。

二日　晴

朝自松本氏帰。　茲日頗大腹寫。　不就床、亦如就床。

書き下し

朝松本氏より帰る。この日頗る大腹寫す。床に就かず、亦床に就くが如し。

語句

・寫　「瀉」の意か。瀉は、そそぐ。はく。口からはきだす。また肛門からくだす。(瀉痢：腹くだし)

・服す　ぴったりとつきしたがって離れない。

口語訳

朝、松本氏のところから帰る。この日非常にひっきりなしに下痢をする。それで、床に就かないでもなく、また床に就いたようでもあつた。

三日　晴　雨晴不弁。

四日　晴

五日　晴

六日　晴

前数日不録。　蓋臥病中。　無事之可録。

書き下し

前数日、録さず。蓋し病中に臥す。事の録すべき無し。

口語訳

この以前数日間、記録していない。つまり、病で臥せっていた。特に記すような出来事がなかった。

七日　晴

以方今之形勢発佳節之賀、以疾漸愈而結髪。余欲記近日之多事矣。　然或以多事怱忙、或逢疾而不暇于録。　今日疾漸愈獨坐無事竹風逐炎熱、涼々冷于膚而意気頗快。　乃追而録之以供于他日之参考。

書き下し

方今の形勢を以て佳節の賀を発す。疾漸く愈ゆるを以てして結髪。余近日の多事を記さんと欲す。然るは或いは多事を以て、怱忙(そうぼう)。或いは疾に逢ひて録する暇あらず。今日疾(しつ)漸く愈(い)え、独座し、事無く、竹風炎熱を逐(お)ひ、涼涼(りょうりょう)として膚に冷たくして意気頗る快なり。乃ち追って之を録し、他日の参考に供せん。

語句

・発　はなつ。おこす。ひらく。　・佳節　佳(よ)い季節。めでたい日。　・賀　よろこび祝うこと。祝賀。　・怱忙　忙しいさま。　・逐　追い払う。　・涼涼　ひやりとしたさま

口語訳

現今の形勢によって佳節の賀を催す。病が漸く癒えたことで結髪する。私はここ最近の出来事を記しておきたいと思う。そいうのは、あるいはいろいろなことがあって忙しく、あるいは病気になって記録する暇がなかったからだ。今日やっと治癒し、独座し、たにもなすべき事もなく、竹を吹く風が炎熱を吹き払い、ひんやりとして膚に冷たく感じられ、意気は大変に快い。そこでこれを記録し、他日の参考に供したい。

おわりに

今回、「丙寅日記」の終わりまで、つまり、八月十六日までを読む予定であったが、紙面のこともあって、七月七日までに留めた。六月廿一日の日記に「二、三日の間、卒卒として採録に暇無し。しばらく大綱を挙ぐ。」と書いてあり、七月七日の日記に「今日疾漸く愈え、独座し、事無く（中略）意気頗る快なり。乃ち追って之を録し、他日の参考に供せん。」とある。それで、遡って六月十六日、二十日、二十三日、二十四日、二十五日の出来事が記されている。十六日と二十日に激しい戦闘が繰り広げられ、二十三日、二十四日、二十五日には、幕府方に拘留されていた長州藩の家老宍戸備後介と重臣小田村素次郎が征長軍副総督松平伯耆守宗秀の独断によって、解き放たれることに関しての記述がある。このことが幕府軍内部で混乱を引き起こすことになっていく。このようなことが背景にあって、七月八日以降の記述に安芸口激戦が展開される模様が記されることになる。これらについては、次回に紹介したい。

日記の解読にあたり、史実について参考となるようなことについて幾分示したが、もとより専門的な知識に乏しく、勉強不足もあって、十分ではない。あるいは、誤った捉え方をしている点も多々あることと思われる。また、日記に出てくる人物がどんな人なのか特定することができていない。姓と名が記されていれば、調べる手がかりもあるかも知れないが、多くの場合、姓のみなので、殆どの場合明らかに出来ていない。

いろいろと不備なところがあることを承知しながら公表することには忸怩たるものもあるが、このことによって教示・助言をいただければ幸いである。

参考文献

・広島県史　・広島市史　・芸藩志　・廿日市町史　・芸藩輯要　・村上家乗　慶応二年（広島県立文書館資料集３）　・広島藩における近世用語の概説（金岡　照編）　・征長の役・安芸口戦（角井菊男　近代文芸社）　・長州戦争（野口武彦・中公新書）　・幕府歩兵隊（野口武彦・中公新書）　・広漢和辞典　・漢字源　・日本国語大辞典　・広島県地名大辞典（角川書店）　・日本歴史大事典（小学館）

特　別　寄　稿

ねんりんピックに出場して

（生涯サッカーの現役として）

林　　孝　治（高校２回）

第21回全国健康福祉祭鹿児島大会は平成20年10月25日(土)より27日(月)まで鹿児島県の各地に分かれて、開催されました。

「かごしまで　元気・ふれあい・ゆめ噴火」をテーマに総合開会式は県立鴨池陸上競技場に、常陸宮殿下・同妃殿下を、お迎えして、晴天に恵まれ、盛大に行われました。今回は特に、「ふれあい」を強調されているように、地域の児童達が広島の宮島の鳥居やカープの、横断幕をつくり、鹿児島の西郷隆盛や篤姫、そして、名所・旧蹟などをクイズ形式として応答をし、楽しい「ふれあい」の場を演出し、大歓迎していただき、今までにない感動と元気を、いただきました。

その翌日より、サッカーは吹上海浜公園と加世田運動公園に分かれ、全国の都道府県・政令都市から出場した52のチームをＡからＭの13ブロックに分かれてボールを追いかけ、「金メダル」をおいかけました。

修道からは今年初参加の東京都多摩ロイヤルズ豊田　隆を加え、広島県代表選手として、脇　洋一・大内　晟、広島市代表選手として、林　孝治・高瀬正則・藪　正梧、そして、今も少しも衰えを見せない「怪物くん」として紹介しましょうか東京都、東京シニア藤田　勉の７名が出場しました。（敬称　略）

第22回大会は（平成21年に）北海道が主催することに、決定しております。

Ｂブロック

	札幌市	広島県	三重県	埼玉県	勝点	得失点差	順位
札幌市		０－３	０－１	０－３	０	－７	４
広島県	３－０		１－２	０－２	４	０	３
三重県	１－０	２－１		０－０	７	２	２
埼玉県	３－０	２－０	０－０		７	５	１

Ｊブロック

	東京都シ	長崎県	愛媛県	堺市	勝点	得失点差	順位
東京都シ		８－０	５－０	７－０	９	２０	１
長崎県	０－８		０－２	１－４	０	－１３	４
愛媛県	０－５	２－０		１－０	８	－　２	２
堺市	０－７	４－１	０－１		３	－　５	３

Ｋブロック

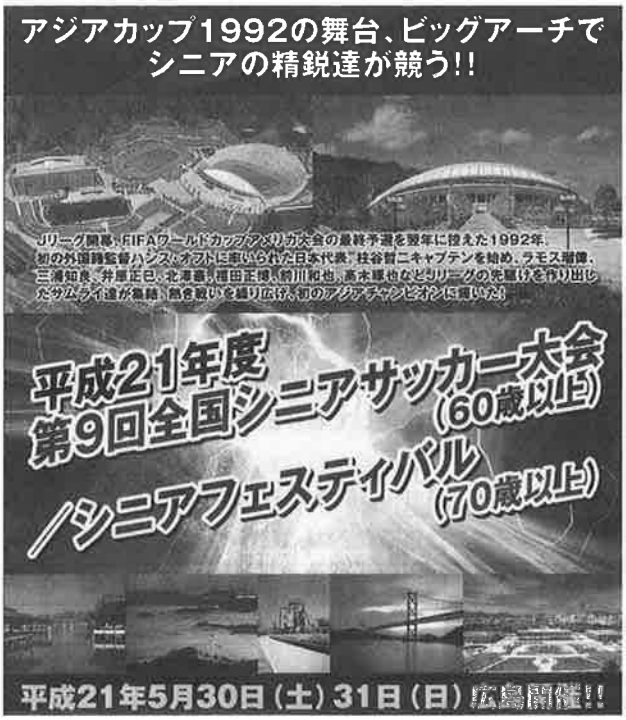
	東京都ロ	広島県	富山県	大阪市	勝点	得失点差	順位
東京都ロ		０－２	３－０	０－０	３	１	３
広島市	２－０		４－０	１－１	７	６	１
富山県	０－３	０－４		０－２	０	－９	４
大阪市	０－０	１－１	２－０		５	２	２

戦績は上記の通りです。「怪物くん」の所属する東京シニアは同じ金メダルでも断然トップの全国一の成績でした。

全国各地で活躍している「修道ＢＯＹ」が年齢に関係なく、サッカーを生涯スポーツとして、楽しみ、交流を深めていただきたいものです。

平成21年５月30日(土)と31日(日)には60歳以上と70歳以上のシニア全国大会を広島で開催することが決定しております。今から準備をしております。全国の各地より多くの「修道ＢＯＹ」の出場を、お待ちしております。この大会は９回目にあたり、なんとか、軌道に乗り、列車が走るようになりました。高齢者社会を迎え、次は80歳以上のゲームができることを期待しております。

以　上



豊田　隆（高19回）
東京都多摩ロイヤル

写真は左から
大内　晟（高11回）、脇　洋一（高15回）、
藤田　勉（高13回）
広島県選抜　　東京都シニア

写真は左から
藪　正悟（高17回）、林　孝治（高２回）、
高瀬正則（高９回）
広島市四十雀サッカークラブ

学園だより

第61回修道高等学校卒業式

第61回修道高等学校卒業式が平成21年３月７日(土)午前10時から大講堂で挙行され、280名の卒業生が巣立った。

式は各クラス学級担任が卒業生一人一人の名前を読み上げ、田原俊典校長から卒業生代表松川周作君に卒業証書が手渡された。

学校長式辞の後、林正夫理事長、世良與志雄ＰＴＡ会長、大田哲哉同窓会会長から祝辞が述べられた。

在校生代表宮本知紘君の送辞、卒業生代表金子大倫君の答辞に続いて湯浅壮太君から卒業記念品(ソメイヨシノ並びに石組み)が学校長に贈呈された。

私学連合会長賞及び校長賞には武田航平君が選ばれた。

続いて土岸高校教頭から皆勤賞受賞者の発表があった。

皆勤賞の受賞者は以下の通りである。

〈皆勤賞　６ヶ年〉

定木　健人、三宅　利寛、小林　弘佳、
新井　宏和、岡田　泰則、近藤　翔太、
中谷　亮祐、湯浅　壮太、宮本　　諒、
志和　将貴、廣田　　大、坂本　拓哉、
新矢　尚央、正留　世成

〈皆勤賞　３ヶ年〉

一井　勇人、大崎　基弘、小田　　渉、
金川　　右、先岡　興甫、上本　　衛、
柳池　翔太、京田　隆寛、服部　賢吾、
三島　　誠、山本　佑樹、青山　雄彦、
田仲　康隆、松本　大輝、三輪　尚充、
香川　俊介、美ノ上太志

同窓会会長祝辞

修道高等学校第61回卒業式に臨み、修道学園中・高同窓会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を述べさせていただきます。

皆さんご卒業おめでとうございます。

本日の栄えあるご卒業は、皆さんの日々たゆまぬ努力の結晶であることはもとより、これまで慈しみ、育んでこられた保護者の皆様や校長先生をはじめ多くの教職員の方々の献身的なご指導によるものであり、謝恩の気持ちを忘れないでいただきたいと思います。

本日めでたく卒業された皆さんを、我が同窓会にお迎えできましたことは、同窓生一同、心からの喜びであります。

同窓会は、同じ学園生活を送った人々が世代を越えて縦横に結びつき、会員相互の親睦と母校修道の発展を目的として日々活動を続けております。

多くの同窓生はあらゆる分野で活躍をされ、わが国はもとより広く国際社会において貢献しておられます。これらの同窓生が相集うために地域や職域で同窓会が組織されており、今後皆さんは全

国各地に進学し、各界で活躍されることになると思われますが、どうか地元広島はもとより他の地域や職域の同窓生と、積極的な交流を図ってください。

儒学者であった貝原益軒は次のように言っています。

「友と交わるには敬愛の二字を心法（しんほう）とす。」

心の法「しんほう」とは「心がけ」という意味であり、友と交わるには敬愛の２字に心がけなさいということであります，学園生活を通して得た多くの友人はもとより、修道の名の下に集う、数多くの同窓生との今後の交わりは、この言葉が教えるように、真心と思いやりの心をもって、人と接することの大切さを教えてくれています。敬愛の精神で相互に結ばれた強い絆は、必ずや皆さんの大きな支えになると確信をいたしております。

さて、皆さんはこれから大いなる目標に向かって、日々研鑽を積まれますが，時に大きな課題が、皆さんの行く手に立ちはだかることに、なるかもしれません。

かかる時にこそ、学園で培われた修道魂を遺憾なく発揮され、様々な困難を力強く乗り越えていただきたいと念じております。

結びに、皆さんのこれからの人生が順風満帆であることを心からお祈りいたしますと共に、次代に寄与する有為な人材となられることを切望して、私のお祝いの言葉といたします。

本日のご卒業、まことにおめでとうございます。

2009年３月７日

修道学園(中・高)同窓会会長　大田　哲哉

人物往来

スリム化と事業選択

山下　　泉氏（高校7回・ゼネラル興産株式会社代表取締役）

建築基準法改正による着工減や資材高騰に加え、金融危機による消費マインドの冷え込みが不動産業界を直撃している。広島商工会議所都市機能強化委員長を務めるゼネラル興産の山下泉社長は「不況はあと一年は続きそう」としつつも、今は「経営のスリム化と消費者ニーズを見極めた事業選択に注力する時」と語る。

―業界の現状は。

昨年は激動の年だった。業界はかつて経験したことのない景気後退の波にさらされた。アーバンコーポレーションの破たんで広島大跡地の開発計画が頓挫したのをはじめ、広島都市圏の開発事業が急激に鈍化した。金融機関も融資に慎重になり「土地を仕入れ、建設して売る」ビジネスサイクルが回りにくくなっている。

―2009年をどう見ていますか。

この一年は停滞が続き、着工数がさらに減る可能性が高い。分譲・賃貸の戸建て、マンションなど、どれも採算の取りにくい状態が続くとみている。

―打つ手はありますか。

徹底したコストダウンが欠かせない。人件費と管理費の削減や遊休資産の処分でスリムな経営に切り替える。消費者ニーズの見極めも重要。「家を建てたい、住みたい」というニーズが消え去ることはない。何をどこに建てるのか、投資先の選択が一層重要になる。

―どんな需要を掘り起こしますか。

マンションなら2千万円台。手ごろな物件は比較的売れている。生活が便利な都市回帰の流れも強く、ＪＲ広島駅近くの「ザ・広島タワー」が好調なように、好立地であれば高額物件や中古物件でも人気が高い。若い世代や高齢者のリフォーム需要も旺盛だ。ニーズを敏感にくみ取る知恵が求められている。

―明るい材料は。

建築コストの値下がりだ。鋼材は昨夏より数割安くなっている。不況下では地価の下落も予想される。供給体制を整えるための「仕入れ時」とも言える。広島都市圏では新広島市民球場に完成に期待している。三井不動産が手掛ける商業・遊技施設だけに頼らず、近隣施設を生かした農作物や魚介類の朝市など、年間六十試合以外にも人を集める手掛けがほしい。広島駅周辺は紙屋町・八丁堀地区との二大都心を形成するだけのポテンシャルがある。

―金融機関に要望することは。

「建設・不動産業はハイリスク」と決めつけず、柔軟な融資姿勢をとってほしい。二、三年先の商品化を目指して土地を仕入れるだけに、販売時には好景気になっている可能性もある。中古物件やリフォームでも長期ローンが組めるような融資プランも望みたい。

―新住宅ローン減税の効果をどう見ますか。

今は所得に安定感がない時代だけに、減税の効果も不透明。土地・建物の譲渡に伴う譲渡所得税を減税するなど税制の抜本的な見直しがあれば、不動産流通も活性化しそうだ。

(09.1.15中国新聞)

医師不足を解決しよう

碓井　静照氏（高校8回・広島県医師会長）

わが国の医療を取り巻く環境は極めて厳しい。長年の財政至上主義による低医療費政策と新医師臨床研修制度は医師、看護師不足を招き、産科、小児科医不足はすでに社会問題。国民の不安を増している。中でも救急医療はニーズが高く、輪番体制だけでは答えられなくなっている。

麻生太郎首相は直近の解決策として、二千二百億円の社会保障費削減の凍結と、後期高齢者医療制度の抜本的見直しを表明した。いずれも速やかに実施されないと医療の質は低下し、安心、安全は確保できない。

社会保障は教育とともに、国の政策の根幹だ。国民の命と健康を守る医療への支出が、財政至上主義のみの立場から削減され続けないよう、見守らねばならない。

厚生労働省は毎年、医療費の過大な将来予測を

立てては医療関係予算を削減してきた。小泉政権下の二〇〇六年、医療関連六法案は審議不十分なまま強行採決され、後期高齢者医療制度が成立。七十五歳以上の高齢者は原則、医療費の窓口負担一割、現役並み所得者は三割負担が強いられる。

そして今、地方の中小病院、診療所の看護師不足は目を覆うばかりだ。どうすれば医療崩壊を防ぎ、誰もが安心な医療を受けられるか、深く考える時だ。

財源問題は簡単ではない。行政の無駄の排除だけでは長期的な財源は確保出来ない。わが国の医療費は、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）先進七ヵ国に遠く及ばない二十二位。医師数をＯＥＣＤ並にするには、現在の一・五倍に増やさなくてはならない。ならば医療費も一・五倍に上げるべきだ。税負担も上げざるを得ないだろう。

医師不足については、新臨床研修制度の早期見直し、医学部の定員増、地方へ向かう意欲ある学生への奨学金制度などが検討されている。しかし、医師養成には十年を要する。短期的対策も必要だ。

そのためには、厚労省から地域支援病院として財政支援を受ける公的大病院が、この問題に真剣に汗を流さなくてはならない。

まずは、機能分担だ。例えば大病院は周産期医療や救急医療などは行うが、一般の病院でも治療可能な疾患は委ねる。民間でできることは民間に移譲するのは当然だ。実現すれば地域医療を支える中小病院の経営も一息つき、医師の待遇改善にもつながる。短期的対策になり得るはずだ。

(08. 12. 10中国新聞)

開高　健「河は眠らない」発売

青柳　陽一氏（高校９回・写真家）

1989（平成元）年に逝去された小説家開高　健氏を撮影されたフォトエッセイ集「河は眠らない」及びＤＶＤがこの度文藝春秋社から発売されました。この本の写真を撮影されたのが高校９回の青柳陽一氏（現在福島県在住）です。青柳氏は1975（昭和50年）年に岩魚（いわな）が縁で釣り好きであった開高氏と知り合い、開高氏の動く映像が撮りたいと口説き続けて、ようやく1984（昭和59）年に撮影されたものがこの度、フォトエッセイ集として発売、ＤＶＤ化されたものです。青柳氏より修道中学校・修道高等学校にこの「河は眠らない」と青柳氏著書「岩魚が呼んだ」をご寄贈いただきました。「河は眠らない」は開高氏のスパイスの効いたセリフの数々が、雄大なアラスカの風景をバックに語られています。映像も開高ファンの中では「幻のビデオ」と言われていたほどの貴重な映像が盛りだくさんの内容となっております。ぜひともご覧ください。

広島経済同友会代表幹事に高木氏

高木　一之氏（高校10回・広島信用金庫理事長）

広島経済同友会は15日、広島市中区のホテルで幹事会を開き、新しい代表幹事に高木一之広島信用金庫理事長(68)（高校10回）を内定した。４月21日の総会で正式に決定し、新体制に移行する。代表幹事は二人制。新体制では筆頭代表幹事に代表幹事二期目を迎える深山英樹広島ガス社長（67）（高校12回）が就任する。現在、筆頭の山本一隆中国医新聞社副社長(65)（高校14回）は二期目の任期満了で退任する。

高木氏は慶応義塾大経済学部を卒業後、1968年に広島信用金庫に入庫、企画部長、常務理事、専務理事などを経て2001年６月から理事長を務める。

会見した高木氏は「百年に一度の経済危機といわれる中、かなり世の中が変わる可能性がある。その流れをきちんととらえて、一歩、二歩先をみた提言をしていきたい」と抱負を述べた。

山本氏は「広島県全体に閉塞感は漂っており、同友会のパワーで少しでも元気なまちづくりをしたいとの思いで取り組んできた」と振り返り、３

月中に道州制導入に向けた報告書をまとめる考えを示した。　(09.1.16中国新聞)

中小活性化と地域力強化

大田　哲哉氏（高校11回・広島電鉄株式会社代表取締役社長）

「百年に一度」といわれる世界的な経済危機に直面する中、中国地方の地場企業が2009年のスタートを切った。経済界や企業は難局にどう立ち向かおうとしているのか。各業界の経営者に、地域経済の見通しや企業の経営戦略を聞いた。

―09年の広島都市圏の景気をどう見通しますか。

１－３月期は経済危機という暴風圏からは出られないと思う。だが春以降は製造業の生産調整がかなり進み、政府の経済対策の効果も期待できる。米国ではオバマ新政権が今月誕生する。米国に加えて中国でも今後、大型の財政出動を予定し、世界経済への好影響も期待できる。春以降、７月か９月か分からないが、地域経済が好転する可能性もある。

―広島県、中国地方の商工会議所連合会のトップも務めています。他地域の状況は。

少しヒヤリングした段階では、自動車関連の企業が多い地域は一様に厳しい景況感だった。造船業が集積する地域は比較的、堅調さを維持している。企業によってはこういう時期だから普段は採用できない優秀な人材を確保したいという声も聞かれた。

ただ景気は良くなる時も悪くなる時も、大都市から中小都市に及ぶ傾向があり、今後は景気悪化の波及が懸念される。

―商議所として何に取り組みますか。

中小企業の活性化と、都市再生を通じた地域力の強化が二本柱だ。中小企業対策では、日本商工会議所（日商）と一体となった政府などへの要望活動に加え、地域の金は地域で落とす地域循環型システムの構築に取り組む。地場製品の購入運動を強化する。

―都市再生についてはどうですか。

広島市民球場跡地の活用策のとりまとめをきちんとやらないといけない。今、ボールを市に投げており、これから市とキャッチボールを繰り返すことになる。跡地活用の一環である商議所ビルの移転も、09年度は具体的にどういう規模の建物にするかなど、商議所としての計画案を作成する。一歩も二歩も前進の年にしたい。

―今年は総選挙の年です。政治への要望は。

政府は日商などの要望も取り入れ、経済対策を打ち出している。ただ経済対策は第二次補正、09年度予算案とリンクしており、国会審議がぎくしゃくせず円滑に進むことを望んでいる。いずれにしろ、政権交代の可能性もある総選挙の結果が日本経済に大きな影響を与えるのは間違いない。

(09.1.7中国新聞)

供給安定へ露からもＬＮＧ調達

深山　英樹氏（高校12回・広島ガス株式会社代表取締役社長　執行役員）

「液化天然ガス（ＬＮＧ）の調達先が多様化でき、供給の安定化が増す」と話すのは、広島ガス株式会社の深山英樹社長。ロシア・サハリンからのＬＮＧ輸入開始を本年度内に控える。インドネシア、マレーシアに続き、３カ所目の調達先となる。20年間、最大で年間21万トンを調達する。「相手は国営企業。一企業で交渉するのは限界があり、国の支援をお願いしたい」と強調する。

物価高を受け、ガス消費も節約ムードが広がっているという。「炎の力は替え難い。地道に需要を掘り起こしたい」

(08.10.7中国新聞)

都市の香り

上田　宗冏氏（高校16回・(財)上田流和風堂理事長）

昨年11月、江戸時代の武家文化を伝える上田家上屋敷を130余年ぶりに構成再現した西区古江東町の上田流和風堂。４月４日から二週間限定で特別公開（完全予約制）するほか、連動して食・泊・学をテーマにしたイベント企画もあり、広島が生んだ武家茶道文化を全国へ発信していく。

特別公開は伝来茶道具や美術品など100点余りを当時の様式のままに披露。武家茶道の精神を脈々と引き継いできた上田宗箇流の16代家元、宗冏氏は、「当家に伝わる公文書をたどっていると50年

ごとに時代の変わり目が見えてきます。いつの時代にも合うとは限らない、合わない時代もある。が、伝統継承者として、合わない時代も続けていかなければなりません。何もしなかったら衰微していく一方。ここ十数年、江戸文化を見直す機運が高まっており、私のライフワークでもある再現事業は、機運とタイミングが合ったように思います。時代の空気を読み、新しい芽を出していくこと、継続していくためのしっかりとしたスタンスも必要です。どんな世界でも大切なことではないでしょうか」

都市の香りのような存在として、上田宗箇流から情報発信していきたいとも。自分を律して己の信じる道を進んでいく―　武士道精神で困難な時代を乗り越えたい。

(09.1.1広島経済レポート)

広島には新しいものを生み出す力

大歳　卓麻氏（高校19回・日本ＩＢＭ株式会社会長）

「広島から日本を元気にしたい」と話すのは、日本ＩＢＭ株式会社の大歳卓麻会長。廿日市市出身で、１月末の総会で東京広島県人会の副会長に就任した。

閉塞ムードが広がる中で、「ビジネス、教育、生活など全ての点で新しいものを生み出す必要がある。広島にはその力がある。」と強調する。総会には約1300人が集まった。「県人会は経済界でもさまざまな業種の人がいて、政治家も官僚も文化人もいる。それだけに新しい考え方やアイデアが出てきやすい」

(09.2.4中国新聞)

授業に活用浄土教研究

渡辺　郁夫氏（高校28回・修道中学校・修道高等学校教諭）

「人間は本来、世間的な役割と、精神的な部分については世俗を超えたものを持っている存在だと思う」。広島市中区の修道中・高校で国語を教える渡辺郁夫さん（51）は、「歎異抄を読む」などの著書を持つ浄土教の熱心な研究者でもある。

国語教諭と浄土教。渡辺さんの中でこの二つは自然に結びついている。子どものころ、祖母が熱心に念仏する姿を見て育った。修道高１年のとき、歎異抄や般若心経、観音経などを原文で読み、早稲田大文学部で東洋哲学を専攻。同大学院では親鸞の教義、法然とその弟子たちの論争をテーマに論文を書いた。

広島に戻り、29歳のとき、母校の教師になった。大学時代に歎異抄の研究をやり残したことが頭から離れず、30代の終わりに学校の紀要に書き始めた。歎異抄の中の親鸞語録を自分なりに解説する作業だった。

「歎異抄は付き合えば付き合うほど奥が深い。私にとっては尽きることのない泉」

紀要の文章に加筆して出版したのが「歎異抄を読む」。41歳だった。その後40代に書いたエッセーをまとめて「発掘歎異抄」を昨年出版した。また、今年５月「歎異抄を読む」の増刷版を出す予定でいる。「15歳で初めて歎異抄を読んで、35年かかって、ひとつの区切りですね」

教師になったころ、大学で学んだ東洋哲学や浄土教などを生徒にできるだけ伝えたい―と考えた。「宗教にかかわるので私学の方が受け入れられやすいと思った」

30代、国語の授業で生徒に読ませるため「東方通信」というプリントを７年間、ほぼ毎週書いた。谷川俊太郎の詩や芥川龍之介、森鷗外、夏目漱石、谷崎潤一郎の小説、万葉集、ギリシャ神話、プラトン、ヘルマン・ヘッセなど幅広く紹介。映画や音楽、美術の話を織り交ぜてあるが、仏教と儒教の歴史や教えの話しも盛り込んだ。

生徒と一緒に論語や歎異抄の読書会も行った。そうした活動をもとに、2006年度から２年間、日本私学教育研究所の委託研究員を務め、「心を育てる国語教育の展開」という論文をまとめた。国語の教科書を「徳育」に生かすために活用するのが趣旨だった。

古文の説話には仏教文学が多く、漢文は老荘思想を知る手掛かりになる。「村上春樹の作品が高校の教科書に入っているが、仏教的に解釈するとよく分かるところがある」。現代文では、現行の教科書の少なくとも５割から７割の教材で徳育が可能だろう、という。

「心を育てる国語教育の展開」には、「人間固有の宗教心の開発をめざして」という副題が付いている。自らを「念仏者」と呼ぶ渡辺さんは、凶悪な事件が相次ぐなか、「宗教心を育てる教育」の必要性を論文に込めた。

「しかし、宗教にまがいものが多いのも事実。それを見分ける目を持つことは難しい。私の場合、20代のころからいろいろなものを読み、自分で考える中で目が養われた」

仏教の伝統的な教義が排除する考え方であっても、自分で現地を歩き、解釈を試みた。

「自分の中の不安を外から補ってもらいたい、何かを信じさせてほしい、という人はカルトに弱い人かもしれない。私にとって浄土教とは何か、ひとことではとても言えない。真実とはそういうもののような気がする」

(09.3.9中国新聞)

汗流し奉仕の原点学ぶ

蔵田　　修氏（高校30回・広島総合法律会計事務所）

広島ロータリークラブでは、新しい国際奉仕事業として、３年前から「マレーシア・サラワク州の先住民族イバンの生活向上支援」を行っています。２年目の昨年は、実際に現地に訪問して共同台所建設作業を行いました。

実際の滞在は３日間だけでしたが、イバンの人々が森と川に囲まれたロングハウスの中で助け合いながら生活していることを体験することができました。村民が共同で生きている素晴らしさを体験して、人間は物がなくても明るく楽しく生きていけるということを再認識することができました。

イバンの人からは、物品のみの援助だった１年目とちがい、今回は実際に援助する人が訪問し、一緒に作業をしてもらったのでとても感動したとのコメントをいただきました。

今回の訪問を通じて「奉仕をするとは、資金援助するだけではなく実際に汗をかかなければ相手に伝わらない」という奉仕の原点を学んだ気がします。みなさんも機会があればぜひ体験してください。

(09.1　ちゅーぴー子ども新聞)

宮島観光客数を将来350万人に　夜のにぎわいで長期滞在目指す

中村靖富満氏（高校30回・㈱やまだ屋代表取締役社長）

宮島は08年、観光客数が過去最高を記録した。「宮島が世界遺産登録されて12年。これまでの地道な観光ＰＲがようやく実り、国内外に浸透してきたのだと思います。08年12月に休業し、11年８月にリニューアルオープンする宮島水族館もラストイヤーということで多くのイベントを行い、家族連れでにぎわった。３年間の休業が痛手となるかもしれませんが、今秋（予定）には海運業のリベラホールディングスが建設する美術館の開館にも期待したいです。外国人観光客数も、過去最高となった。アジアからの観光客はもちろん、欧米からの観光客が目立ったのが特徴ですね」

アジアからの観光客は日本人客と同じような滞在傾向にあり、厳島神社や大鳥居、紅葉谷公園など主要な所だけを巡るため滞在時間が短いのが特徴という。一方、欧米人は長時間に滞在が目立つ。その八割近くが弥山に登るといい、弥山登山同好会が外国人向けに弥山登山ルートガイドマップを作成した。課題となっている夜のにぎわいづくりには、「屋形船や大鳥居のライトアップ、宮島口商店街から海を挟んで宮島表参道商店街にかけて花ぼんぼり風の行灯でライトアップする『ひめあかり』などを行っています。屋形船などは随分定着してきましたが、まだ宿泊客からは『夜は暗くて外に出にくい』、『泊まっても夜行くところがない』などのご意見をいただきます。旅館組合や商店街と話し合い、商店街の営業時間の延長、旅館でイベントを行うなどで夜の宮島を楽しんでもらい、また泊まりたいと思ってもらえるようなソフト面の対策も検討しています」

今後、年間350万人の観光客を受け入れるためのハード面については、「対岸の宮島口の渋滞や駐車場の確保が問題となっており、廿日市市にも整備を要望しています。渋滞を緩和するに当たり、駐車場の空きや渋滞情報の提供など早急に取り組みたい」

このほか、対岸の宮浜温泉などがある大野地区との観光連携や、宮島競艇内イベントホールの利

用なども検討していきたいとしている。

「夢はいつの日か、宮島に歌舞伎小屋を復活させたいですね。金毘羅、出雲、宮島が西日本三大歌舞伎と言われていたんです。20年前に宮島歌舞伎振興会を私の父が設立したこともあり、芸能を復活できる施設をとひそかに願っています」

(09.1.1広島経済レポート)

学び合い市政に貢献を

野々部尚昭氏（大法16回・愛知県稲沢市議）

「全国の市議が、英気を養える日本一のサロンにしたい」。全国若手市議会議員の会の新会長に9月1日、就任した。35歳までに初当選した45歳未満の市議がメンバーで、約三百人が集う。

会合を通じて、地方の現状を学び、互いに切磋琢磨するのが目的で、会は今年、設立15年目を迎えた。

各地の市議会で若手が占める割合はまだまだ少ない。「われわれの世代がしっかり仕事をすれば議会は活性化する。若者の雇用やネット社会がはらむ問題などに対応するためにも同世代の議員が元気にならないと」と訴える。

広島修道大学時代に政治学を学びながら選挙ボランティアも経験して「政治にはまった」。1995年、出身の愛知県稲沢市で選挙違反事件が起きた。金で政治家が決まってはならないと憤り、その年の市議選に出馬。25歳で初当選した。

地元の駅周辺の活性化を唱えたり、民間総合病院の誘致を訴え、過去2回、市長選に出馬したが、いずれも落選。

現在は市議4期目。市政に対する熱い思いは「ふるさとをもっと良い街にしたい」。

新会長として取り組む課題は、減少している北信越や中国地方のメンバーを増やし、活動を盛り上げること。会の15年史をつくろうという意気込みも。

高校時代は野球、いまはソフトボールで汗を流す。釣りも趣味で、夏には沖にボートを走らせカジキマグロと格闘した。両親と三人暮らし。

(08.9.13中国新聞)

訃　報

竹下虎之助氏（元学校法人修道学園理事長）
平成20年12月16日　ご逝去　享年84歳

氏は広島県知事を3期12年間務められた後、平成8年4月1日に修道学園理事長として就任。平成12年6月まで2期4年にわたり、学園の発展にご尽力された。

特に修道中学校・修道高等学校の新校舎建築（着工平成11年11月～完工平成15年11月）には多大のご貢献をいただいた。
心からのご冥福をお祈りいたします。

真野　尚氏（元修道中学校・修道高等学校教頭）
平成20年12月25日　ご逝去　享年83歳

氏は昭和25年10月1日に修道学園教諭として就任。また昭和48年からは教頭職（当時の役職名：主事）に就任。約26年にわたり、社会科（世界史）の教鞭をとられた。非常に丁寧で解りやすい授業をされ、生徒の育成・指導にご尽力された。
心からのご冥福をお祈りいたします。

高橋　令之氏（元学校法人修道学園専務理事）
平成21年2月13日　ご逝去　享年88歳

氏は昭和57年4月1日に修道学園事務局長に就任。昭和59年に修道学園専務理事に就任され、昭和60年5月31日に退任。3年2ヵ月にわたり、学園の発展にご尽力された。

心からのご冥福をお祈りいたします。

事務局だより

小説
「昭和まで生きた　最後の大名　浅野長勲」

『「この人がいなかったら、明治維新もその後の廃藩置県、版籍奉還などもうまくいったかどうか」

明治維新後、元勲たちにこう思わせた人物がいた。元安芸広島藩藩主、浅野長勲（あさのながこと）である。』（著書から）

平成20年12月に「昭和まで生きた最後の大名　浅野　長勲」が出版されました。

江戸、明治、大正、昭和の四時代を生き抜き、特に激動の幕末にあっては広島浅野藩最後の藩主として、小御所会議における調停役を弱冠26歳の若さで果たすなど、新しい日本の建設に多大の貢献をされた方であります。

浅野長勲侯は修道の前身である藩校を明治まで継承、運営され、私学修道として再出発した母校に対しても、限りない愛情を注がれ、毎年にわたる多額のご寄附はもとより現在の千田の校地を無償譲渡いただいた方であります。

著書は長勲侯の生涯を長勲侯ご自身の口述記録を織り交ぜながら描かれおり、特に幕末の激動期にあって、新しい時代の草創に向けて奔走される長勲侯のお姿には深い感銘を受けます。

小説の序章と終章には、彫刻家の平櫛田中との交流の様子が描かれておりますが、著書のなかで紹介されている平櫛田中制作の木彫「浅野長勲公寿像」及び「霊亀随：神が品のよい寿老人の立ち姿でいて、足下には長寿のシンボルである霊亀が随っている様子を彫刻したもの」は、長勲侯がモデルになったものであります。

著者：江宮　隆之氏／発行所：グラフ社

（ご参考）

『浅野長勲公寿像』

衣冠姿の長勲侯の彩色木彫

昭和９年　制作　浅野家所蔵（昭和20年戦災で焼失）

昭和24年再制作　浅野家所蔵

東京芸術大学美術館所蔵

『霊亀随』（れいきずい）

長寿の浅野長勲侯をモデルにした木彫及び彩色木彫

昭和11年制作　　以後複数体制作されています。

霊亀随の所蔵先

平櫛田中彫刻美術館（東京都小平市）・メナードアートミュージアム・東京芸術大学美術館・日本芸術院・山形美術館　等

厳島神社宝物館には、霊亀を伴った「浅野長勲翁肖像：彩色木彫」が常設展示されています。

なお、「浅野長勲公寿像」と「霊亀随」のブロンズ像が井原市立田中美術館に所蔵されています。

事務局　田中　佳樹

平成21年度同窓大会開催一覧

◎広島修道大学大学院同窓大会

開催日時：2009年６月27日(土)
会　　場：ホテルＪＡＬシティ広島
(広島市中区上幟町7-14　TEL082-223-2580)
会　　費：6,000円
《お問い合わせ先》
広島修道大学大学院同窓会事務局（石井健二郎氏）
TEL0824-22-2171

◎修道学園（中・高）同窓大会

開催日時：2009年９月５日(土) 18：00～
会　　場：リーガロイヤルホテル広島
(広島市中区基町6-78　TEL082-502-1121)
会　　費：6,000円
《お問い合わせ先》
修道学園（中・高）同窓会事務局
TEL082-241-6686

◎広島修道大学同窓大会

開催日時：2009年11月７日(土) 19：00～
会　　場：リーガロイヤルホテル広島
(広島市中区基町 6-78　TEL082-502-1121)
会　　費：6,000円（予定）
《お問い合わせ先》
広島修道大学同窓会事務局
TEL082-830-1321

全国制覇を成し遂げました

・大分国体陸上競技大会において４年の山縣亮太君が少年男子Ｂ100mにおいて優勝し全国制覇を成し遂げました。タイムは10秒66、修道生としては陸上競技での全国制覇は初の快挙となりました。

・書道の第28回全日本学生選抜書道展において、高校の部で５年の竹野翔哉君が文部科学大臣賞（全国第１位）を受賞しました。また、中学の部においては、３年の荒谷悠輔君も文部科学大臣賞（全国第１位）を受賞し、ダブル受賞を達成しました。また両名とも広島県からのメイプル賞の受賞が決定いたしました。

中学サッカー班県総体で50年ぶりの優勝

昨年９月に行われた第57回広島県中学校総合体育大会で中学サッカー班が50年ぶり３度目の優勝を達成しました。２年前より取り組んできた体力強化メニューを継続した成果をイレブンは最高の形で証明してみせました。

「母校修道の優勝を祝い讃える集い」開催

2008年11月22日(土) 13：00より大分国体陸上競技大会で全国制覇を成し遂げた山縣亮太君と50年ぶりに県大会で優勝を成し遂げた中学サッカー班に対してその功績を讃える集いが修道中学校・修道高等学校十竹ホールにて開催されました。高校２回永谷道孝氏の発案により「母校修道の優勝を祝い讃える集い」と題して開催され、多くの賛同された同窓生有志が参加され盛会裡に終了しました。

（中・高）同窓会名簿発刊について

同窓会名簿第35号を以下のとおり発刊いたします。

１．発刊予定：2010(平成22)年３月末
２．販売価格：5,500円(送料・消費税・振込手数料を含む)
３．名簿発刊に係る業務委託先：(株)サラト
所在地〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172
TEL(079)284-1380　FAX(079)224-7746

後日、同窓生の皆様宛に、調査はがき等が送付されますので積極的に調査にご協力いただきますようお願いいたしますと共に、ご購入にご協賛いただきますようお願いいたします。

●会報誌への寄稿、支部、同期会などのご報告につきましては、ご多忙にもかかわらずご協力いただき誠にありがとうございました。今後も会報誌への記事を募集いたしておりますので、積極的に原稿をお寄せいただきますようお願いいたします。次回の発刊は平成21年９月の予定です。

※会報誌寄稿についての問い合わせは下記のとおりです。
TEL(082)241-6686(同窓会直通)　FAX(082)249-0870
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp (原稿のデータ送付先)